

鳥の北斗七星

宮沢賢治

青空文庫

つめたいいじの悪い雲が、地べたにすれすれに垂れましたので、野はらは雪のあかりだか、日のあかりだか判らないようになりました。

鳥の義勇艦隊は、その雲に押しつけられて、しかたなくちよつとの間、亜鉛の板をひろげたような雪の田圃のうえに横にならんで仮泊ということをやりました。

どの艦もすこしも動きません。

まつ黒くなめらかな鳥の大尉、若い艦隊長もしやんと立ったままうごきません。

からすの大監督はなおさううごきもゆらぎもいたしません。からすの大監督は、もうずいぶんの年寄りです。眼が灰いろになつてしまつていますし、啼くとまるで悪い人形のようにギイギイ云います。

それですから、鳥の年齢を見分ける法を知らない一人の子供が、いつか斯う云つたのでした。

「おい、この町には咽喉のこわれた鳥が二疋いるんだよ。おい。」

これはたしかに間違いで、一疋しか居りませんでしたし、それも決してのどが壊れたのではなく、あんまり永い間、空で号令したために、すっかり声が錆びたのです。それです

から鳥の義勇艦隊は、その声をあらゆる音の中で一等だと思っていました。

雪のうえに、仮泊ということをやっている鳥の艦隊は、石ころのようです。胡麻つぶのようです。また望遠鏡でよくみると、大きなや小さなのがあって馬鈴薯ばれいしょのようです。

しかしだんだん夕方になりました。

雲がやつと少し上の方にのぼりましたので、とにかく鳥の飛ぶくらいのすき間ができませんでした。

そこで大監督が息を切らして号令を掛けます。

「演習はじめおいっ、出発」

艦隊長鳥の大尉が、まつさきにはつと雪を叩きつけて飛びあがりました。鳥の大尉の部下が十八隻、順々に飛びあがって大尉に続いてきちんと間隔をとって進みました。

それから戦闘艦隊が三十二隻、次々に出発し、その次に大監督の大艦長が厳かに舞いあがりました。

そのときはもうまつ先の鳥の大尉は、四へんほど空で螺旋を巻いてしまつて雲の鼻つ端まで行つて、そこからこんどはまつ直ぐに向うの柱に進むところでした。

二十九隻の巡洋艦、二十五隻の砲艦が、だんだんだんだん飛びあがりました。お

しまいの二隻は、いっしょに出発しました。ここらがどうも鳥の軍隊の不規律なところで
す。

鳥の大尉は、杜のすぐ近くまで行つて、左に曲がりました。

そのとき鳥の大監督が、「大砲撃つ。」と号令しました。

艦隊は一斉に、ががあがあがあ、大砲をうちました。

大砲をうつとき、片脚をぶんとうしろへ挙げる艦は、この前のニダナトラの戦役で
の負傷兵で、音がまだ脚の神経にひびくのです。

さて、空を大きく四へん廻つたとき、大監督が、

「分れつ、解散」と云いながら、列をはなれて杉の木の大監督官舎におりました。みんな
列をほごしてじぶんの営舎に帰りました。

鳥の大尉は、けれども、すぐに自分の営舎に帰らないで、ひとり、西のほうのさいかち
の木に行きました。

雲はうす黒く、ただ西の山のうえだけ濁つた水色の天の淵がのぞいて底光りしています。
そこで鳥仲間マシリイと呼ぶ銀の一つ星がひらめきはじめました。

鳥の大尉は、矢のようにさいかちの枝に下りました。その枝に、さつきからじつと停つ

で、ものを案じている鳥があります。それはいちばん声のいい砲艦で、鳥の大尉の許いいなず嫁けでした。

「があがあ、遅おそくなつて失敬。今日の演習で疲つかれないかい。」

「かあお、ずいぶんお待ちしたわ。いつこうつかれなくてよ。」

「そうか。それは結構だ。しかしおれはこんどしばらくおまえと別れなければなるまいよ。」

「あら、どうして、まあ大へんだわ。」

「戦闘艦隊長のはなしでは、おれはあした山鳥を追いに行くのだそうだ。」

「まあ、山鳥は強いでしょう。」

「うん、眼玉めだまが出しやばつて、嘴くちばしが細くて、ちよつと見掛けは偉えらそうだよ。しかし訳ない

よ。」

「ほんとう。」

「大丈夫だいじょうぶさ。しかしもちろん戦争のことだから、どういう張合でどんなことがあるかわからない。そのときはおまえはね、おれとの約束やくそくはすっかり消えたんだから、外ほかへ嫁いつてくれ。」

「あら、どうしましょう。まあ、大へんだわ。あんまりひどいわ、あんまりひどいわ。それではあたし、あんまりひどいわ、かあお、かあお、かあお、かあお、かあお」

「泣くな、みつともない。そら、たれか来た。」

鳥の大尉の部下、鳥の兵曹長へいそうちようが急いでやってきて、首をちよつと横にかしげて礼をして云いました。

「があ、艦長殿、点呼の時間でございます。一同整列して居おります。」

「よろしい。本艦は即刻そつこく帰隊する。おまえは先に帰ってよろしい。」

「承知いたしました。」兵曹長は飛んで行きます。

「さあ、泣くな。あした、も一度列の中で会えるだろう。」

丈夫でいるんだぞ、おい、お前ももう点呼だろう、すぐ帰らなくてはいかん。手を出せ
。」

二足はしっかり手を握にぎりました。大尉はそれから枝をけて、急いでじぶんの隊に帰りました。娘の鳥は、もう枝に凍こおり着いたように、じつとして動きません。

夜になりました。

それから夜中になりました。

雲がすっかり消えて、新らしく灼かれた鋼の空に、つめたいつめたい光がみなぎり、小さな星がいくつか連合して爆発をやり、水車の心棒がキイキイ云います。

とうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅がはいって、まっ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下って、鳥を握んで空の天井の向う側へ持つて行こうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばう暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつかり合います。

いや、ちがいました。

そうじゃありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登ってきたのです。そこで鳥の軍隊はもうすっかり安心してしまいました。

たちまち杜はしずかになって、ただおびえて脚をふみはずした若い水兵が、びっくりして眼をさまして、があと一発、ねぼけ声の大砲を撃つだけでした。

ところが鳥の大尉は、眼が冴えて眠れませんでした。

「おれはあした戦死するのだ。」大尉は呟やきながら、許嫁のいる杜の方にあたまを

曲げました。

その昆布こんぶのような黒いなめらかな梢こずえの中では、あの若い声のいい砲艦が、次から次といろいろな夢ゆめを見ていたのでした。

鳥の大尉とただ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見合せながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでものぼって行きました。もうマジエル様と呼ぶ鳥の北斗七星ほくとしちせいが、大きく近くなつて、その一つの星のなかに生えている青じろい苹果りんごの木さえ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急にはねが石のようにこわばつて、まっさかさまに落ちかかりました。マジエル様と叫さけびながら愕おどろいて眼をさましますと、ほんとうにからだ枝から落ちかかっています。急いではねをひろげ姿勢を直し、大尉の居る方を見ましたが、またいつかうとうとしますと、こんどは山鳥が鼻眼鏡はなめがねなどをかけてふたりの前にやつて来て、大尉に握手あくしゅしようとしています。大尉が、いかんいかん、と云つて手をふりますと、山鳥はピカピカする拳銃ピストルを出していきなりずんと大尉を射殺いころし、大尉はなめらかな黒い胸を張つて倒れたおかかります。マジエル様と叫びながらまた愕いて眼をさましますと、ああんばいでした。

鳥の大尉はこちらで、その姿勢を直すはねの音から、そのマジエルを祈いのる声まですつか

り聴きいて居りました。

じぶんもまたためいきをついて、そのうつくしい七つのマジエルの星を仰あおぎながら、ああ、あしたの戦たたかいでわたくしが勝つことがいいのか、山鳥がかつのがいいのか、それはわたくしにわかりません、ただあなたのお考かんがえのとおりです、わたくしはわたくしにきまつたように力いっばいたたかいます、みんなみんなあなたのお考かんがえのとおりですとしずかに祈つて居りました。そして東のそらには早くも少しの銀の光が湧わいたのです。

ふと遠い冷たい北の方で、なにか鍵かぎでも触ふれあつたようなかすかな声がしました。鳥からずの大尉ナイトグラスは夜間双眼鏡を手早く取つて、きつとそちを見ました。星あかりのこちらのぼんやり白い峠とうげの上に、一本の栗くりの木が見えました。その梢にとまって空を見あげているものは、たしかに敵の山鳥です。大尉の胸は勇ましく躍おどりました。

「が、あ、非常召集しやうしゆう、が、あ、非常召集」

大尉の部下はたちまち枝をけたてて飛びあがり大尉のまわりをかけめぐります。

「突貫とつかん。」鳥の大尉は先登せんとうになつてまっしぐらに北へ進みました。

もう東の空はあたらしく研といだ鋼はがねのような白しろ光びかりです。

山鳥はあわてて枝をけ立てました。そして大きくはねをひろげて北の方へ遁にげ出そうと

しましたが、もうそのときは駆逐艦くちくかんたちはまわりをすっかり囲んでいました。

「があ、があ、があ、があ、があ、があ」大砲の音は耳もつんぼになりそうです。山鳥は仕方なく足をぐらぐらしながら上の方へ飛びあがりました。大尉はたちまちそれに追い付いて、そのまっくろな頭に鋭すどどく一突き食ひとつらわせました。山鳥はよろよるとなって地面に落ちかかりました。そこを兵曹長が横よこたからもう一突きやりました。山鳥は灰いろのまぶたをとり、あけ方の峠の雪の上につめた横よこたりました。

「があ、兵曹長。その死骸しかいを営舎までもって帰るように。があ。引き揚げっ。」

「かしこまりました。」強い兵曹長はその死骸しかいを提さげ、鳥の大尉はじぶんの杜もりの方に飛びはじめ十八隻はしましたがいました。

杜に帰って鳥の駆逐艦は、みなほうほう白い息をはきました。

「けがは無いか。誰たれかけがしたものは無いか。」鳥の大尉はみんなをいたわってあるきましました。

夜がすっかり明けました。

桃ももの果汁しるのような陽ひの光は、まず山の雪にいっぱい注ぎ、それからだんだんに流れて、ついにはそこらいちめん、雪のなかに白百合しろゆりの花を咲かせました。

ぎらぎらの太陽が、かなしいくらいひかつて、東の雪の丘おかの上に懸かかりました。

「観兵式、用意つ、集れい。」大監督が叫びました。

「観兵式、用意つ、集れい。」各艦隊長が叫びました。

みんなすつかり雪のたんぼにならびました。

鳥の大尉は列からはなれて、ぴかぴかする雪の上を、足をすくすく延ばしてまっすぐに走つて大監督の前に行きました。

「報告、きようあげがた、セピラの峠ていはくの上に敵艦の碇泊ていはくを認めましたので、本艦隊は直ちに出勤、撃沈げきちんいたしました。わが軍死者なし。報告終りつ。」

駆逐艦隊はもうあんまりうれしくて、熱い涙なみだをぼろぼろ雪の上にこぼしました。

鳥の大監督も、灰いろの眼から泪なみだをながして云いました。

「ギイギイ、ご苦労だった。ご苦労だった。よくやった。もうおまえは少佐になつてもいいだろう。おまえの部下じやくんの叙勲じよくんはおまえにまかせる。」

鳥の新らしい少佐は、お腹なかが空すいて山から出て来て、十九隻に囲まれて殺された、あの山鳥を思い出して、あたらしい泪をこぼしました。

「ありがとうございます。就ついては敵の死骸しかいを葬ほうむりたいとおもいますが、お許し下さいまし

ようか。」

「よろしい。厚く葬ってやれ。」

鳥の新らしい少佐は礼をして大監督の前をさがり、列に戻もどって、いまマジエルの星の居るあたりの青ぞらを仰ぎました。（ああ、マジエル様、どうか憎にくむことのできない敵を殺さないでいいように早くこの世界がなりますように、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません。）マジエルの星が、ちようど来ているあたりの青ぞらから、青いひかりがうらうらと湧湧きました。

美しくまつ黒な砲艦の鳥は、そのあいだ中、みんなといっしょに、不動の姿勢をとって列ならびながら、始終きらきらきら涙をこぼしました。砲艦長はそれを見ないふりしていました。あしたから、また許いいなすけ嫁嫁といっしょに、演習ができるのです。あんまりうれいので、たびたび嘴くちばしを大きくあけて、まつ赤に日光に透すかせましたが、それも砲艦長は横みの向いて見逃みがしていました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月11日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

烏の北斗七星

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>